Vol.19
静岡文化情報
街かど

MACHI-KADO

(財)静岡市文化振興財団

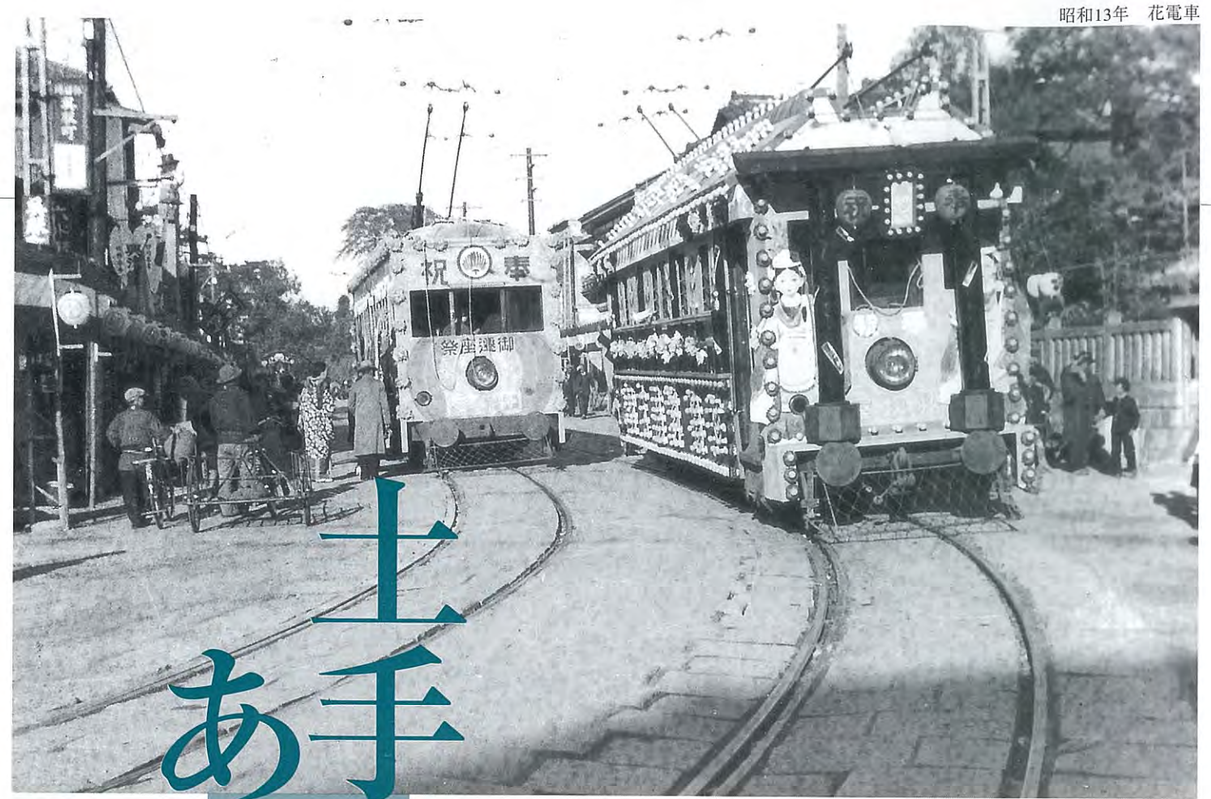
特集
駿府生まれの戯作者
十返舎一九物語

ぶらり春の散歩路
土手通り界隈
路地裏散策

土手通りあの日あの時
文・牧田静二氏

Information
(財)静岡市文化振興財団インフォメーション
静岡アートギャラリー
芹沢銈介美術館

昭和13年　花電車



土手通りあの日あの時

文：牧田静二氏
（大鋸町在住）

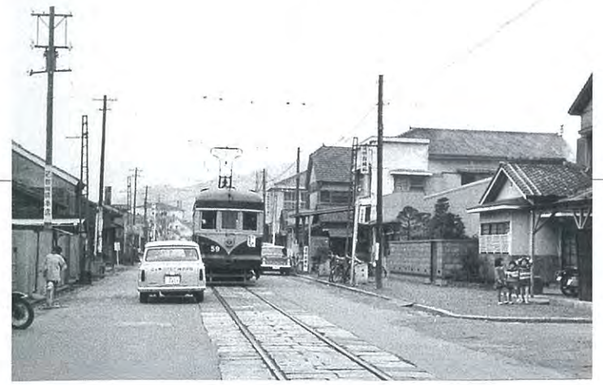
馬場町を始点として車町－研屋町－大工町－大鋸町－通車町を抜けて安倍川の火屋の土手に通ずる道路は昔から「土手通り」と呼ばれてきた。江戸時代の古地図にもその存在が記されているように、この道は古くから東海道の本道である本通りや新通りの脇道的な役割をはたしてきたのである。

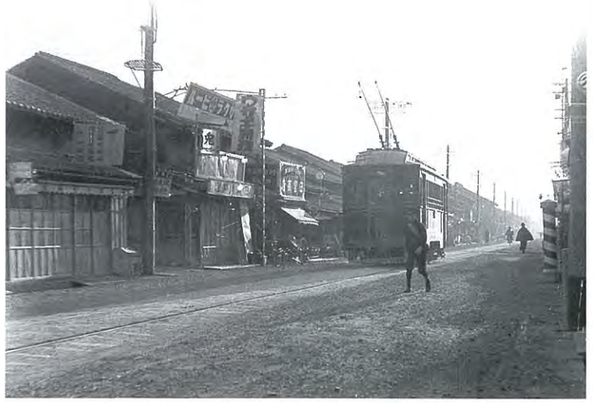
しかし、「土手通り」の名前の由来もはっきりしないし、そもそも土手の存在そのものについて疑問を呈する人も少なくない。昨今では路面の平坦化が進みその痕跡を探しにくくなったが、例えば、大鋸町通り（旧寺町通り）と土手通りとの間には高低差があり、自転車で走るとはっきり判る坂道となっている。私の死んだ母は明治36年生まれで、大正10年（1921）大鋸町へ嫁入ってきたが、その頃、四番町にあった畑へ行くのに、土手を越え、水路にかかった橋を渡って行ったという話を聞いたことがある。

また、大鋸町の「大鋸」というのは文字通り大きな鋸のことで、大きな鋸を使用して柱や板を製材する人、すなわち木挽職人達の住んでいた町で、私の家は代々その棟梁を務めてきたが、戦前、馬力等で運んできた大きな材木を土手の傾斜を利用して邸内にころがし入れたという話を聞いたことを覚えている。「土手通り」の名称はどうやらこの道自体が低い土手を形成していたことから名付けられたものと思われるのである。

昭和40年代の通車町

昭和40年代の通車町


昭和32年頃　茶町付近


昭和8年頃　土太夫町、夕方

職人で栄えた街

戦前から終戦後の昭和20年代にかけて、番町、新富町、田町の一帯は、静岡市特産の下駄、鏡台、家具等の一大生産拠点であった。狭い露地をはさんでこれら木工業者の作業所、住家がひしめきあう人口密集地帯であった。そして「土手通り」はこれら住民の生活を支える商店街として繁栄を続けてきたのである。時代と共に産業構造に変化が起こり、これら産業が衰退し、また、区画整理事業の完成によって「土手通り」をはじめとする周辺道路の幅員も広がり、街路としての外観はととのったが、その代り往年の活況が失われてしまったことは時代の流れとはいえ、昔を知るものにとっては淋しい限りである。

牧田さんの家に残っている
木挽商の組合員証（明治初め頃）

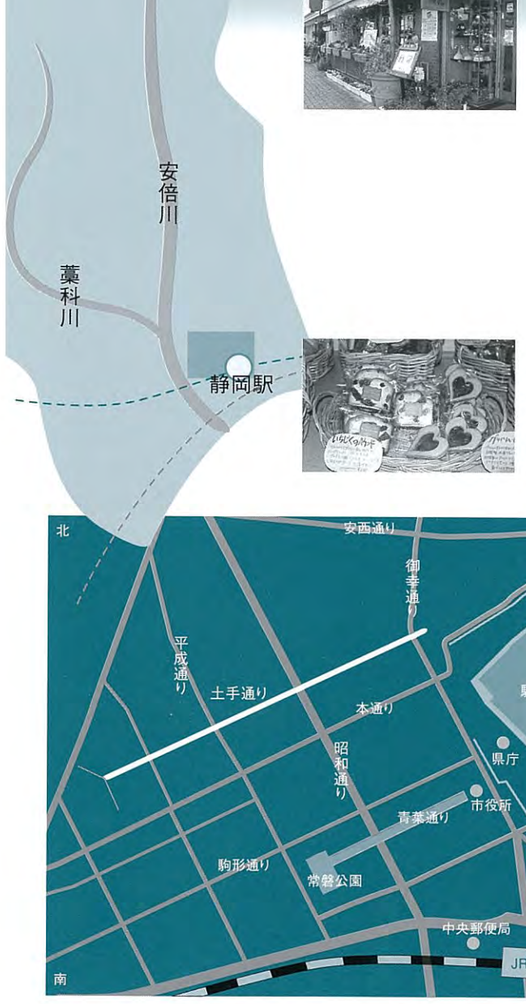
昭和40年代の大鋸町

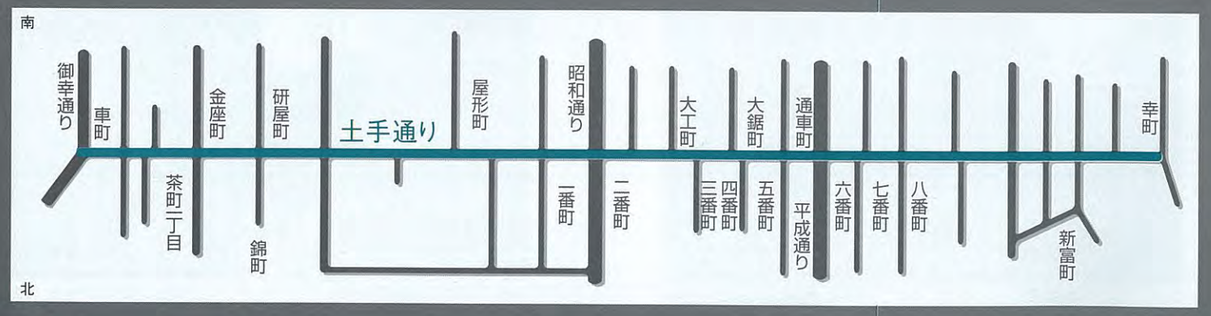
昭和40年代の玄忠寺裏

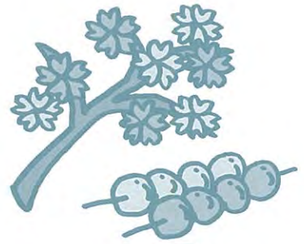
ぶらり春の散歩路

土手通り 路地裏散策

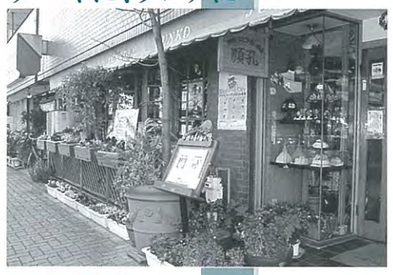
市街地から
ちょっと足をのばせば、
おちついた町並みが姿を現す。
ぽかぽか陽気の散歩路。







ケーキに、ランチに



B 順孔

ケーキで有名な順孔。薬膳カレーと焼きたてパンの2種類のランチは大人気。ロマンティックながらも落ち着いた雰囲気が大人の女性のハートを掴んでいる。

ぷりんぷりん

D マロン

ふかふかの焼きたてパンといえばマロン。今、人気のプリンパン、その場で温めてくれるパニーニなど種類もいっぱい。どれにしようか迷ってしまう…。

C 仁志野

団子の絵の看板が目印。ここ仁志野は焼きたての団子が味わえるお店だ。店内に一歩入れば団子を焼く香ばしい香りがたまらない。みつだれがいっぱいかかった定番の焼き団子のほか、胡麻みつだれ、七味しょうゆ、いそべ等々他では味わえない団子がいっぱい。甘い団子を食べたら、次はしょっぱい団子…。食べ始めたらもうとまらない。焼き団子以外の草あん団子等もつぶあん、こしあんそろっておすすめ。

多品目団子屋

金座町

車町

御幸通り

B

C D

E

土手通り

茶町一丁目

GS

A

芸術の白い牛

A a-cafe

住宅街の一角…。突如、大きな白い牛が目に飛び込む。1階は額の工房「アートプッシュピン」、2階はそのオーナーが経営するギャラリー&カフェ「a−cafe(アーカフェ)」である。

a−cafeでは、ウォーホール、マーク・コスタビなどのオーナーのコレクションをはじめ、静岡市出身の石上和弘氏や清水市出身の常葉勇氏の作品などを展示したりと、現代アートを中心としたギャラリーとなっている。入り口にかなりの存在感で構えている白い牛も石上和弘氏の作品だ。

また、作品を鑑賞しながら、飲んだり食べたりくつろげるのがa−cafeのすごいところ。ウィークディのランチは日替わりで、デザートまで付いてなんと500円〜。黒豆ごはんやさつまいもごはんなどメニューもヘルシーで女性に人気だ。夜はオリジナルカクテルなどが楽しめるほか、2ヵ月に1回くらいの割合でジャズライブなどを開催したりしている。

「女性が一人でも安心して来れる店」というのも納得。社会人でもなく、家庭人でもなく、一人の人間に戻ってホッとできる空間がここにはある。

赤白黄色…

E 諸国みそ

味噌汁といえばおふくろの味…。各家庭でその味は異なり、一人一人の好みもさまざまだ。

「諸国みそ」は、そんな繊細な欲求を満たしてくれる。北は東北から南は九州まで、店名のとおり全国各地の味噌が小売りされている。一般のお客様に小売りされているものだけでも、その数は20種類以上。店内には、樽に入った味噌が所狭しと並び、味噌の香りが広がっている。

これだけの味噌を前に、気圧されてしまうところだが大丈夫。迷っていれば、甘いのがいいのか、甘くないのがいいのか、粒入りがいいのか、粒なしのものがいいのか等、丁寧に好みを聞いてくれ、自分にあった味噌を選んでもらえる。カップのサイズも500gのものから1kgのものまであり、好みの味噌を量り売りしてくれる。何種類かの味噌をブレンドすることも可能だ。

創業80年、現在は3代目のご主人がお店を守っている。料理のプロが使う「袱紗味噌」をも任されている確かな味に出会える店。大きく「諸国みそ」と書かれたのれんが目印だ。

※袱紗味噌…料理人は自分の味噌の味を持っており、その微妙にブレンドされた味噌は、袱紗に入れて持ち歩くほど大事なものであることから、料理人の味噌をこう呼んでいる。

おもちゃ箱のシュークリーム

G ビスケットキング

手作りケーキとコーヒーのお店。店内は、まるでおもちゃ箱の中にいるようなとってもかわいらしい雰囲気。ケーキやシュークリームは、すべてオーナー飯塚さんの手作り。テイクアウトもOK。

H ペルル オランジェ

母娘の二人で温かく迎えてくれるのがここペルルオランジェ。喫茶とお菓子のお店としてオープンし、まもなく3年になる。

「ペルル」とはフランス語で飾り珠のこと。「オランジェ」(オレンジ色)を基調にしたアットホームな雰囲気の店内には、まさしく「ペルル」のようなお菓子がいっぱいだ。素材を大切にし、無添加・無着色にこだわった焼菓子やケーキは、老若男女を問わず人気。結婚式の引き出物やギフトにも引っ張りだこだ。

すべて手作りの煮込みハンバーグも人気メニュー。「あっちっち!」と食べながら、心もほんわか温かくなる。

母娘二人とも、もともとは勤め人で、お店を持つなんて考えていなかったとか…。退職後、娘さんが東京へ修業に行ったのを機に、お店をオープンする運びとなった。お菓子は娘、喫茶と食事は母の担当。娘さんの腕に触れてみて驚いた。生地をこねたり重いオーブンを扱ったり、仕込みで鍛えられた腕には、みごとな力こぶが…。かわいらしい笑顔とは対象的な逞しさに、お菓子に対する情熱を感じた。

金座町

E 諸国みそ

(←P.4)

土手通り

F 画家 山本八千代さん

F 女流画家

午後の暖かい日差しに視線を向けながら、遠い昔を懐かしむように、穏やかにそして丁寧に彼女は語り始めた…。

女流画家山本八千代さん、88歳。小倉遊亀氏に師事。数々の美術展で入賞し、静岡の美術界をリードしてきた女性である。

彼女は、沼津の医者の娘として生まれ、何不自由ない暮らしを送っていた。当時では珍しいピアノも持ち、女学校を卒業後、上野の音楽学校に入学した。ところが、そんな幸せな彼女を突然不幸な出来事が襲う。耳の病にかかり、大好きなピアノが続けられなくなってしまったのだ。

沼津に戻った彼女を待っていたものは、静岡の醤油の醸造業を営む家への縁談だった。現在の静清信用金庫研屋町支店の一帯は、当時、この醤油の醸造蔵が建ち並んでいた。彼女はわずか20歳。親の決めた縁談に従い、嫁いできたものの商売の右も左もわからず、毎日辛い日々を送っていたという。2男1女をもうけたが、二人の子供を失ってしまう。そんな失意を救ったのは、絵との出会いだった。もともと祖父が趣味で凧絵を描くなど、美術の好きな家系であったため、すんなり絵の世界に溶け込んだ。醤油屋を廃業してからも、忙しい毎日の中で絵を描き続けた。彼女の作品には花鳥が多い。車の運転を現役でしていたころは、愛車のルノーに乗り、写生に出かけていたという。

昔の思い出がいっぱい詰まった小箱を開け、一つずつ思い出を語ってくれた。その中に中国大陸の地図の上に桜の押し花が貼ってある古い手紙があった。「醤油屋で働いていた若い衆が、戦争で出征して中国に行ったの。これはね、その若い衆が中国から送ってきてくれた桜よ。彼は、戦死してしまったけど…」

この辺りは、静岡大火、第2次世界大戦と2度にわたり焼け野原となった。山本さんの穏やかな表情の中にも、そんな時代を生きてきた女性の強さが窺えた。

第67回院展入選作品 「水辺」(昭和57年)

静清信用金庫
研屋町支店

研屋町

I

[千鳥座のこと] 土手通り今昔

錦町、現在の顕光院の裏あたりに、千鳥座という芝居小屋があった。千鳥座は、明治17年丸川座という芝居小屋が火災にあった跡にでき、昭和の初めまで興行をつづけた。

千鳥座の界隈は、千鳥座を中心に食べ物屋や宿屋、人力屋、菓子屋などが並び、たいそう賑やかだったそうで、興行のときなどは「顔見せ」といって、役者がそれぞれ衣装をつけて人力車に乗り、2、30台が列になり、太鼓を叩いて市中を廻ったという。

歌舞伎の千両役者や松井須磨子もきたが、昭和の初めには、安来節がよくかかり、素人も飛び入りで唄ったりした。また、女相撲や一番町小学校の学芸会が行われたり、芝居小屋をマーケットのようなものに利用したこともあるという。

七間町に若竹座があったことは、以前紹介したが、この他にも朝日座、明治座などの芝居小屋が市内にいくつかあったそうだ。

静岡の人は案外芝居好きなのだろうか…?

『千鳥座のあった場所』

錦町

中部電力

AMEDEO

屋形町

J (株)小川富次郎商店

なつかしい看板が目をひく(株)小川富次郎商店は、明治から5代続いた化粧品店。この建物は昭和20年中頃に建てられたもの。戦争の爪あとの残る当時、あまりりっぱな建物が建ったので、皆がびっくりしたとか…。

ドアの取っ手など金具もすべて手作り。建物の中はしっくいの壁と木の床、木のカウンター、木の書類入れと何とも言えない温かみを感じさせ、当時のいい仕事が偲ばれる。

土手通り路地裏散策

軒先にゆれる紙袋

K 佐藤紙店

軒先にゆらゆら紙袋がゆれる。

佐藤紙店は、紙袋の専門店。紙袋1枚から販売し、中には、既成の袋に手をつけるなど使いやすくして販売している。

昭和通り

一番町

I 石川サイクル

自転車といえば、通勤やお買い物に使う軽快で小回りのきく手軽な乗り物、そんなイメージがある。しかし、あなどってはいけない、自転車をこよなく愛する人たちは、自転車のパーツ1つにもこだわり、自分流の自転車をアレンジしては、長い距離を、急な坂のある山道を風をきって走って行く。ここ石川サイクルはそんな自転車好きが集まる店。「スウィフト レーシング」というレーシングチームもあり、お店を経営する石川さん親子を中心に日曜日には練習会と称して山の中を走りに出かけたり、鈴鹿や富士五湖のレースに参加しているそうだ。

自転車は、パーツごとに自分にあったものを探すことができる。フレーム(本体)は1cm刻みであり、それによってハンドルの位置も変わる。ハンドルも長さ、角度など凝りだしたらきりがない。お尻を乗せるサドルなどは10回も変えた人がいるそうだ。

店内には、グッズも豊富にそろっているが、自転車用の靴は、底にネジがつき、ペダルにひっかけて引く時も力がかかるようになっていたり、手がかじかまないように塗る唐辛子入りのオイルなどもあって驚かされる。

話を伺っていると、「スウィフト レーシング」のメンバーが集まってきた。自転車の魅力を尋ねると「坂が急できつかった」、「走っていると、突然車が出てきて、山に張り付いた」など苦労話が次から次へと飛び出し、石川さんに「自転車を好きになるようなことを言ってくれ」と声をかけられるが、苦労話も生き生きとして実に楽しそうだ。

察するに、自転車には、自分の足で風をきって走る爽快感、坂を上りきった時の達成感など様々な楽しさがあるのだろう。しかし、乗り出すと止められなくなる本当の魅力は「走らなければわからない」とメンバーたちは皆、そう言いきっている。

[化物の話] 土手通り今昔

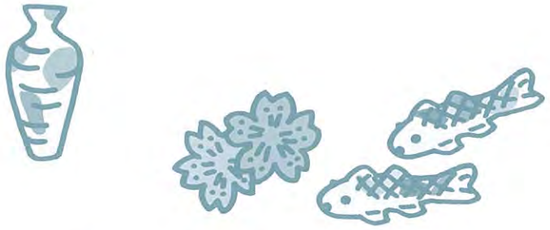
一昔前、大人でさえも大入道、天狗、お化け等が実在するものと恐れていた時代があった。そんな時代の青年の中には悪戯好きな者もいて、昼間のうちに大入道に見えるような着物を作り、夜になると人通りの少ない所で、大入道となって、通行人をおどかした。おかげで、その辺りは夜通る人がいなくなってしまったという。おどかされた人はさぞや肝をつぶしたことだろうが、今となっては、素朴で可笑しい話だ。

さて、大正から昭和の初め頃と思うが、現在の昭和通りの辺りに「たぬき屋敷」と呼ばれる家があり、そのたぬき屋敷を見に来る人が多くなったので、土手通りからずっとお菓子屋さんが並んだという。

また、床の間に水ガメのお化けが出ると評判の家もあり、そこも夜となると化物屋敷をのぞきに来る人が増えたので、おでんの屋台が並んだそうだ。

はたして、化物は現れたのだろうか…?

顛末は定かでないが、化物をネタに盛り上がり、一儲けしようとする当時の人たちのパワーが妙に楽しい話である。



昭和通り

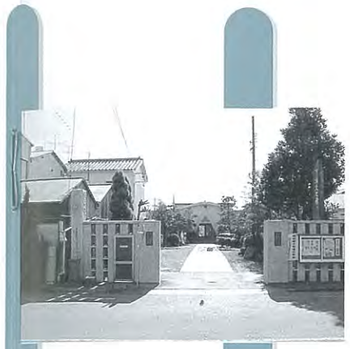
THE 看板

卍福泉寺

●大鋸町の碑
駿府96ヶ町の碑第1号

卍玄忠寺

静岡の下駄の基礎を作った下駄久の碑がある玄忠寺。
大正時代まで行われた境内での相撲は、駿府の名物だった。



THE 看板

M 恵比寿らくだ

らくだに乗った恵比寿さまの看板が福福しくてなんだか楽しそう。土手通りに最近できた新しい居酒屋、その名も「恵比寿らくだ」。
らくだの旅のようにゆったりとくつろげそうな雰囲気。お店の名物は、デラックス焼き鳥だ。

M 大工町　大鋸町　通車町

●関根麩店

●髪切案内人　四番町の「ヘアアドバイザー梶」(→P.7)の看板

土手通り

二番町　三番町　四番町　五番町 L

平成通り

●GS　六番町　七番町

P ゼヴァン (→P.9)　O 犬の保育園 (→P.9)

N 八番町

土手通り今昔 ［江戸時代の町名が残る町］

土手通り界隈には、古い町名が数多く残る。研屋町、大工町、大鋸町、通車町等々。おもしろいことに、これらの名前は、安倍川から始まり土手通り沿いに仕事の流れに従って並んでいるようだ。

当時、安倍川から運び込まれた木材は大八車を使って運ばれ、板に木挽きされた。大八車を引く職人がいた町は通車町、鋸を使って木挽きをした職人が住んでいたのは大鋸町となる。板になった木材は大工によって使われる。大工が使う刃物を研ぐ職人も隣接した地域に住んでいた。こうして、大工町や研屋町が栄えたのではないかという説もあるようだ。

また、この界隈には「番町」という町名も多い。番町とは、もともと武家屋敷町の代名詞であって、全国の城下町でもよく見られる町名だ。

徳川家康公の駿府在城に伴い、多くの武士が駿府にやって来た。彼らが住んでいたのが、この地域であり、武家屋敷が建ち並んでいた。家康公の没後、国元に帰る武士が多く、この辺りは無住の町となってしまった。明治の始めまで、「明屋敷」と言われ、田畑が広がっていたという。明治維新後、徳川慶喜公に従って移住した多くの旧幕臣が、ここに宅地を割り当てられた。彼らは、竹細工等で生計を立てていた。この辺りに職人が多いのもこの名残であろうか。維新後、武士の住む町として北番町、南番町と称されていたこの地域は、明治22年の市制施行により南番町を一番町から八番町等に分けることとなった。

家康公時代にも、そして時を越え慶喜公の時代にも、ここは、武士の住む町「番町」であったのである。

●ヘアアドバイザー梶
「髪切案内人」の看板でおなじみ
(→P.8)

L 食料品店いさみや

「見るだけで楽しい手作り花器」食料品店いさみやの前にはそんな看板が立てられている。おやっと思い、店内をのぞくと、食材の並ぶ店の真ん中に花器が置かれている。

これらは皆、店主の池ヶ谷亥千郎さんが作ったもの。池ヶ谷さんは、20年前から陶芸を始め、5年程前から年末には花器、夏には食器の展示即売を始めた。

土の温かみのある色とりどりの花器は、取っ手のついた物、桜の花の描かれた物と様々で、デザインも一つ一つとても凝っている。ふと見ると鯉や桜や瓢箪の形をしたかわいらしい箸置きもあり、食材とのミスマッチも何だかとても楽しくなってくる。聞けば、池ヶ谷さんは、ずっと日本画を描いてきたとのこと。お家の中に飾られた淡く精密な白鳥や鷺の大作からその絵心がうかがわれる。

年2回の展示即売は、看板に日にちを予告するそうなので、要チェックだ。

土手通り今昔 ［愛染川の話］

昔、土手通りには小さな土手があり、その裾を川が流れていたという。

お侍がこの川のほとりで見初めた人といっしょになったので、愛染川と呼ばれたという話を読み、このロマンティックな話に魅せられて、何人かの人に愛染川の名前を尋ねてみた。話では、一番町のことだというが、何となく耳に覚えのある人はいるものの、判然とせず、中には愛染明王があったからだと教えてくれる人もいた。

確かに土手通りには水路があり、その水は安倍川から流れ出て、現在の三番町ウオチョーのまえから土手通りに入り、通車公園の横から本通り、駒形通りへと流れていた。市の公式の記録にもこの水路は記されていて、昭和30年後半に道路の下へ入れてしまったとのことだ。この水は、田畑の灌漑用水として使われたそうで、八番町に住む古老も通りに沿って川が流れ、アヒルが泳いでいたのを覚えている。

さて、肝心の愛染川だが、一番町あたりに水の流れていた記録はない。ただ、昔の家の前には、たいてい、家でつかった水を流す排水路があり、排水路とはいえ、魚が住めるほどきれいな水が流れていたという。下水の発達とともに排水路もなくなり、記録にも残らないが、住んでいる人はそれを川とよんだのではないか…。そんな推理をすることはできる。

そこに恋が生まれたか否か…?

ロマンはロマンのまま、すべてを解き明かさない方が愛染川の美しい名にふさわしいのかもしれない…。

N こうばな・さかき 増田

お寺の多いこの町にふさわしく、こうばなとさかきだけが置いてある。小さなお店にいるのは84歳のおばあちゃんだ。皆がお店に寄り、いろんなことをおばあちゃんに話していく。おばあちゃんは、「話してすっきりすればいいよ」と言う。

お店にかかる手作りののれんのように可愛らしく温かいお店だ。

写真を撮らせてと言うとおばあちゃんは、恥ずかしがって中に入ってしまった。

O 犬の保育園

「可愛がっている犬は家族同然ですから」と話すのは、犬の保育園を開いた斉藤絹代さん。保育園では、犬のホームステイとデイサービス、つまり、旅行や入院、あるいは働きに出る人のために時間単位、月単位で犬を預かったり、犬の散歩の出張サービスを行ったりしている。

飼う人の気持ち、犬の気持ちに沿った預かり方をしてくれるのは、犬好きの斉藤さんらしく、以前お葬式のある家の犬を預かった時は、出棺に合わせて犬を連れて行き、一緒にお見送りをさせたこともある。

表の看板にプー園長常勤書かれているが、プー園長とは斉藤さんの愛犬プーのこと、斉藤さんは理事、そして毎日預けられていくラブラドールレトリヴァーの風花は今や職員なのだそうだ。

写真左:職員の風花
中:斉藤理事
右:プー園長

通車公園

●髪切案内人
(←P.8)

Q ヴァンガード VANGUARD

看板がシャレていてなんだかとても楽しそうな喫茶店。中はログキャビン風で、ロフトのような2階もあり、Tシャツやバッグ、小物等のグッズも売っている。

マスターの伊奈透さんは、音楽活動やラジオのパーソナリティをしていた個性派。お店の名前「ヴァンガード」は、マンハッタンのジャズクラブ「ヴィレッジ・ヴァンガーズ」からつけたそうだが「先駆者」という意味もあって、幸町の住宅街の中にポツンとある姿にふさわしい。

「ゆがんだ個性ですから」と伊奈さんは謙遜するが、お店には自由で温かみのある雰囲気が漂っている。最近は、オリジナルのTシャツも作り始めたそうで、表の看板ももちろん伊奈さんの手作りだ。

THE 看板

Q

幸町

S 鈴木冷菓店

土手通りの突き当たり、赤いのれんが目印の鈴木冷菓店。

冬は黄金饅頭、夏はアイス饅頭が人気。店先で子供たちがお菓子の品定めをしている。子供たちのお目当てはどうやらアイドルのブロマイドらしい。おすすめのお菓子を尋ねるとビッグチョコバーとベビースターラーメンを指さし、そしてやはり「黄金饅頭がおいしい」と教えてくれた。

S

土手通り

八番町

P O

Nこうばな・さかき 増田
(←P.8)

P ゼヴァン REVANG

土手通りも八番町辺りは、静かな住宅街が続く。その中に「アジアのブランドを構築しよう」というお店がオープンした。「ゼヴァン」ー安い金ーという意味のアジアの雑貨を扱うお店だ。

ブランドとは、「流行に流されないコンセプトを持ち、常に同じクオリティを提供できる品質保証」。大量生産で物が無機質になっていく中、アジアの雑貨が醸し出すノスタルジックで癒される雰囲気をコンセプトによい物を選び、お客様のニーズに応えながら、アジアの雑貨を世界に通用するブランドにしようと目論む。

アジアの雑貨は安価であるが、決して質が悪いわけではない。店内におかれたベトナム食器は、一つ一つが手描きで、描いた人の息遣いや生な温かさが感じられ、布のバッグやストールはなんとも深い色合いを湛えている。私たちに安かろう悪かろうの偏見があっただけなのだ。

この土手通りも「普通が良い」と、そして、「公園や住宅があり、住む人の生活のある場所でそこに生活している人たちと話をしながら、商品開発をしていきたい」と語る。流行のアジアンテイストではなく、アジアの雑貨のよさを見出し、世界に通用するブランドにすることはアジア文化の再発見であるように思う。

アジアにあるものは、まさに―ゼヴァン―「安いけれど金」ということなのだろう。

R

珊瑚塗の作品

新井さんの漆器には、聖火台の形をヒントにした洋菓子用の器や洋食用のスプーンがあり、現代日本の生活同様、和に洋が取り入れられている。又、最近は、漆塗りの技術を身につけたいと美術大学を出た若い人が新井さんのもとへ通ってくるようになった。

漆職人の数は随分減ってしまったが、漆器はその美しさを守りながら、今の時代を経て少し違った形で次の時代へ引き継がれていくのかもしれない。

R あらい漆工房 新井吉雄さん

漆器の産地、静岡では、職人さんの個性ある仕事から、様々な変り塗が生まれた。その中で、珊瑚塗はあらい漆工房の登録商標。海底でゆらめく珊瑚樹の模様を漆の強弱で描いた優美な変塗だ。

新井吉雄さんは、明治から続くあらい漆工房の4代目として珊瑚塗はもちろん、様々な漆塗りの技法を引き継いだ。しかし、「伝統は伝承ではない」。技術を伝承していくだけではなく、「漆を今の生活に近づけたい。現代にマッチしたデザインを考えたい」と語る。

あらい漆工房には、漆器のギャラリーがあり、様々な塗り方がされた新井さんの作品を展示している。声を掛ければいつでも見ることができ、最近は、小・中学生が伝統工芸を勉強しによく訪れるそうだ。

「漆は生き物。太陽の恵をうけた漆の樹液を使ったやさしくおだやかな器」を木造のギャラリーで眺めていると静かな気持ちになってくる。

T

T (社)日本将棋連盟公認 高木将棋教室

高木秀彰さんが、将棋教室を開いたのは、大病がきっかけだった。2度目の手術の際「自分の好きなことがはっきりわかった」、「生きて戻れたら好きなことをやりたいと思った」という。そして、「好きなこと」とは、もちろん「将棋」にほかならなかった。

高木さんは、小学校時代に坂田三吉の映画「王将」を見て、将棋を始めた。自分より強い人を求めては、同級生から近所の大人たちと対戦、めきめき腕を上げ、各大会で入賞、広津久雄9段から「プロにならないか…」の声がかかったこともある。そして、何よりも忘れられないのは、あの羽生善治元七冠との平手対局。羽生元七冠のアマチュアとの平手は2度とありえないという貴重な体験をした。

そんな高木さんが「好きなことを」と、会社を退職して開いた教室には園児から大人までたくさんの人がやってくる。何時間いてもかまわない教室で、子供も大人も一緒に将棋に熱中している。特に、子供たちが習い事というより、自由にのびのびと好きなことをやっている姿が印象的だ。

将棋の魅力を「将棋盤には宇宙がある。81マスには無限の広がりがあり、勉強すればするほど奥が深く、底がないけれど、やればやっただけ、確実に自分の力はあがっていく。好きであれば、勝てる」と語る。会社に勤め、日が変わる程の残業があった時も将棋雑誌で手法を勉強し、休日出勤した土曜日も徹夜で仲間と将棋をさした高木さんらしい実感のある言葉だ。

十返舎一九物語

駿府生まれの戯作者

棚橋正博著『笑いの戯作者十辺舎一九』より

スラリとした長身の男前
日本初のプロ作家にして、ベストセラー作家。
「浮世第一のあっぱれの戯作者」
といわれたその人は・・・

十返舎一九（1765～1831）

土手通りの顕光院には、「東海道中膝栗毛」の作者「十返舎一九」の生まれた重田家の墓があり、一九の弟儀十郎もそこに眠っている。一九の墓は東京都中央区勝ちどきの「東陽院」にあるが、この顕光院でも「心月智光信士」という戒名をもらっていて、縁浅からぬ様子。

あまり知られていないが、十返舎一九は、なんと静岡は両替町の生まれなのだ。

一九は、1765年、駿府町奉行同心重田鞭助（しげた べんすけ）の長男として生まれ、本名を「重田貞一（しげた さだかず）」といった。若い頃は、武家に仕え、江戸から大坂へ行き、職を辞して材木商の婿となるが、離縁。30歳で江戸に戻り、山東京伝、北川歌麿などの戯作者、画家を後援した版元「蔦屋」で絵作り下仕事をした。

顕光院

日本初のプロ作家

顕光院内の重田家の墓

一九のデビューは山東京伝の本の挿絵からで、「膝栗毛」は絵も文章も描ける、なんでも自作のコスト安を版元に売り込んでスタートさせた。

さて、初版を「浮世道中膝栗毛」といったこの本は、予想に反して売れに売れた。主人公の弥次さん、喜多さんコンビが、旅の恥はかき捨てとばかりに行く先々で失敗を繰り返し、まるで漫才のボケとツッコミのような可笑しさで読者の心をがっちりつかみ、二編、三編と編を重ね、人気は人気を呼び、東海道の旅が終わっても読者は納得せず、金毘羅参詣、宮島参詣、木曽街道から善光寺、そして草津温泉と旅は続き、弥次さん、喜多さんが江戸に帰ったのは、初版が出版されてから21年の後になるから、なんと長い旅であったことか…。さらに連載の途中では、弥次さん、喜多さんの出自が知りたいという読者の要望に応え、旅の始まりを記した番外編「膝栗毛発端（はじまり）」を描いている。この中で弥次さんは駿府の出身、喜多さんは江尻出身の女形旅役者、二人は、安倍の花街（くるわ）で知り合ったことになっていて、一九の静岡生まれを感じさせ、なんだか可笑しい話であるが、読者は弥次さん、喜多さんを実在するかの如く扱い、「膝栗毛」をいかに熱狂的に支持していたか伺いしれる。

こうして、一九は、まさに筆一本で生活する日本初のプロ作家となり、滝沢馬琴をして「浮世第一のあっぱれの戯作者」といわしめるところとなった。

まだまだすごい十返舎一九

一九には、「年賀の挨拶に訪れた人を無理やり入浴させて、その間に着物を借用して自分が年始回りをした」とか「一九の葬式では、花火を遺体の懐にしのばせておき、いざ火葬という際に爆発させて会葬者を驚かせた」などのおもしろおかしい逸話がある。しかし、これらは、人気者の弥次さん、喜多さんと作者の一九を混同したもので、一九自身は、まじめで潔癖ともいえる人柄だったらしい。一九と一緒に旅をした人は、膝栗毛のような珍道中を期待したが、一九は旅先での見聞をただメモにとり、冗談のひとつも言わなかったという。

とはいえ、一九は女性によくもてた、一説によると180cmの長身で、男ぶりもよく、才能もあるから女性がほっておかなかったのだろう。2度の婿入りとさらにもう一度の妻帯をし、吉原でもよく遊んだらしい。一九は「人情本」の創始者といわれるが、「人情本」とは、いわゆる恋愛小説で、これまた日本初の女性読者をターゲットとした読み物を創始したといわれるから、女性との経験が功を奏したといえるだろうか。

大正から昭和にかけて出版された『東海道中膝栗毛』

木村文庫の中の一九の自筆草稿

東海道中膝栗毛の原本

さらに、一九は作品の量と幅広さでも群をぬく。「膝栗毛」執筆当時でさえ年間20作を描き、そのジャンルも黄表紙、滑稽本、洒落本と挙げればきりがなく、中にはお酒の作り方、お菓子の作り方などの実用書もあって驚かされる。

今年は、「膝栗毛」が出版されてちょうど200年にあたるというが、何よりすごいのは、弥次さん、喜多さんという誰でも知っているこの二人が、200年もの間、私たちを笑わせ、楽しませてくれていることだろう。まこと、あっぱれ十返舎一九!である。

静岡の十返舎一九スポット

十返舎一九資料展示

「弥次喜多」生誕200年を記念して静岡市観光協会では駿府十返舎一九研究会（長田公民館学習グループ）の協力をえて、十返舎一九の資料を展示中。
展示期間 平成14年12月27日まで
午前8時30分から午後5時15分
（土、日、祝日はお休み）
場所 静岡市観光協会フロアー（御幸町 電々ビル2階）

一九作品コレクション「木村文庫」

一九作品の版本コレクションは、「木村文庫」の名称で静岡市立中央図書館に管理されている。このコレクションは、昭和62年静岡在住の故木村豊次郎さんが静岡市に寄贈したもの。原本蔵書数224点、中には一九自筆草稿も1点含まれている。

丸子橋付近にある「膝栗毛」の歌碑

碑には、丸子の茶屋での出来事を喜多さんがまとめた狂歌がきざまれている。
「けんくはする夫婦は口をとがらして
鳶とろ・にすべりこそすれ」

Newスポット

今年、3月15日に除幕式を行い、巽櫓前「家康の散歩道」に、「弥次・喜多像」が設置された。

Information
発見!すてきな街。
(財)静岡市文化振興財団 インフォメーション
Good communication

静岡アートギャラリー

静岡アートギャラリーは平成9年5月に開館し、今年で6年目を迎えます。静岡駅南口から徒歩1分、サウスポットビル内に位置し、ジャンルにとらわれない幅広いアートを紹介し、皆様に楽しんでいただくための都市型美術館です。

開館以来「ジョルジュ・ルオー展」「印象派～エコール・ド・パリ展」などの洋画展、「徳川慶喜展」「ジョサイア・ウェッジウッド展」などの博物展、陶器展、また「有元利夫展」「人間国宝シリーズ」など広く国内外のアートをご紹介してきました。

更に、市民の作品発表の場として貸展示事業もご好評いただいております。これからも、多彩な企画展を始め、講演会や美術教室など各種事業も織り交ぜ、皆様に親しまれる美術館を目指します。

展覧会のご案内

人間国宝シリーズ5
稲垣稔次郎の型絵染
‥写生から模様へ‥

第1期(屏風・壁掛けを中心に)平成14年3月16日～3月31日
第2期(着物・帯を中心に)　平成14年4月 2日～4月14日
入場料　大人300円　小人(中学生以下)150円
※市内在住の70歳以上の方及び身体障害者手帳等をご持参の方は無料。4月1日以降は小人は無料。

特別展「パピエ・ア・ラ・モード」

二人のアーティストが紙で創り出した18～20世紀ヨーロッパファッションの世界をお楽しみいただけます。
会　期　平成14年4月27日～6月30日
入場料　一般700円　大高生500円
※中学生以下・市内在住の70歳以上の方及び身体障害者手帳等をご持参の方は無料。

お問い合わせ
〒422-8067静岡市南町18番1号サウスポット静岡3階
TEL.054-289-5400 http://www.art.shizuoka-city.or.jp
開館時間　10:00～19:00(入館は18:30まで)
休館日　月曜日(祝日の場合はその翌日)・年末年始
※貸展示室のご利用についてはお電話ください。

芹沢銈介美術館

静岡市街を歩くと、駐車場の壁画や市役所のホールのタペストリー、和菓子屋の包装紙や喫茶店の看板など、芹沢銈介のデザインが私達の生活に溶け込んでいるのにお気づきですか。

静岡市立芹沢銈介美術館は、静岡市の名誉市民、型絵染(かたえぞめ)の人間国宝、芹沢銈介より作品とコレクションの寄贈をうけて昭和56年6月に開館しました。弥生時代の遺跡で有名な登呂遺跡公園の中にあります。年3回の企画展を開催し、芹沢銈介とその業績を広く、様々な面より紹介しております。

芹沢銈介は、型紙と防染糊(ぼうせんのり)をつかって布や紙に模様を染める伝統的な型染(かたぞめ)に創作を加え、型絵染を確立した染色作家です。その仕事は、着物や帯、のれん、壁掛、屏風、夜具地、染絵など型絵染の仕事をはじめ、本の装幀、ガラス絵、書に家具や建築設計など多岐にわたります。

白井晟一(しらいせいいち)設計による美術館建物は「石水館(せきすいかん)」と呼ばれ、平成10年には公共建築百選のひとつに選ばれました。

日曜・祝日には芹沢銈介が仕事場兼応接間として使っていた、「芹沢銈介の家」を公開しております。実技講座や講演会、友の会活動も行っております。静岡市民の安らぎの空間である芹沢銈介美術館にぜひお越しください。

沖縄なつかしい二曲屏風

美術館展示室

芹沢銈介の家

美術館建物外観「石水館」

現在開催中の企画展のお知らせ
芹沢銈介と沖縄‥我が夢に通う沖縄‥

期間　開催中～5月26日(日)
休館日　毎週月曜日、3／22、4／30、5／7
時間　9:00～16:30
内容　芹沢銈介を染物の道に導いたのは沖縄固有の染物である紅型(びんがた)でした。「こんなに美しい楽しい染物以上の染物があるかと、夢のような思いでした」とのちに芹沢は紅型との出会いを語っています。今回の展示では、沖縄に取材した芹沢作品と、芹沢が集めた紅型の着物や、風呂敷、幕などのほか、陶器、漆器、絵画、玩具などの芹沢コレクションもあわせて紹介しております。

お問い合わせ
〒422-8033静岡市登呂五丁目10番5号
TEL. 054-282-5522 FAX 054-282-5510
http://www.city.shizuoka.shizuoka.jp/seri-site/index.htm

アクセス
●JR静岡駅北口バス④のりばから「登呂遺跡」行き乗車、約20分終点下車
駐車場 登呂公園南側に有料駐車場があります。(大型バス11台、乗用車57台)

開館時間 9:00～16:30
休館日 月曜日・祝祭日翌日・毎月末日・年末年始・展示替え期間中
入館料 大人410円 高大生250円 小中生150円
※静岡市在住70歳以上の方、身体障害者手帳等の交付を受けている方とその介助者1名は無料。
※4月1日以降は中学生以下は無料。

限りない未来のために。
これからの医療を考える
富沢病院は、
やさしく未来を見つめ、
二十一世紀に向けて
「医心伝心」を
実践していきます。

静岡リハビリテーション病院
静岡富沢病院

静岡富沢病院 〒421-1311 静岡市富沢792-1 (054)270-1201(代)
医療法人社団 清明会静岡リハビリテーション病院 〒421-1311 静岡市富沢1405 (054)270-1221(代)

From Editor 編集後記

◆市街地からほとんど離れていないのに、とても懐かしいにおいのする町でした。取材に快く応じてくださった皆様、ありがとうございました。

◆大火と戦争で貴重な資料や写真が失われていたり、昔を知るお年寄りがいなくなっしまったり…残念。

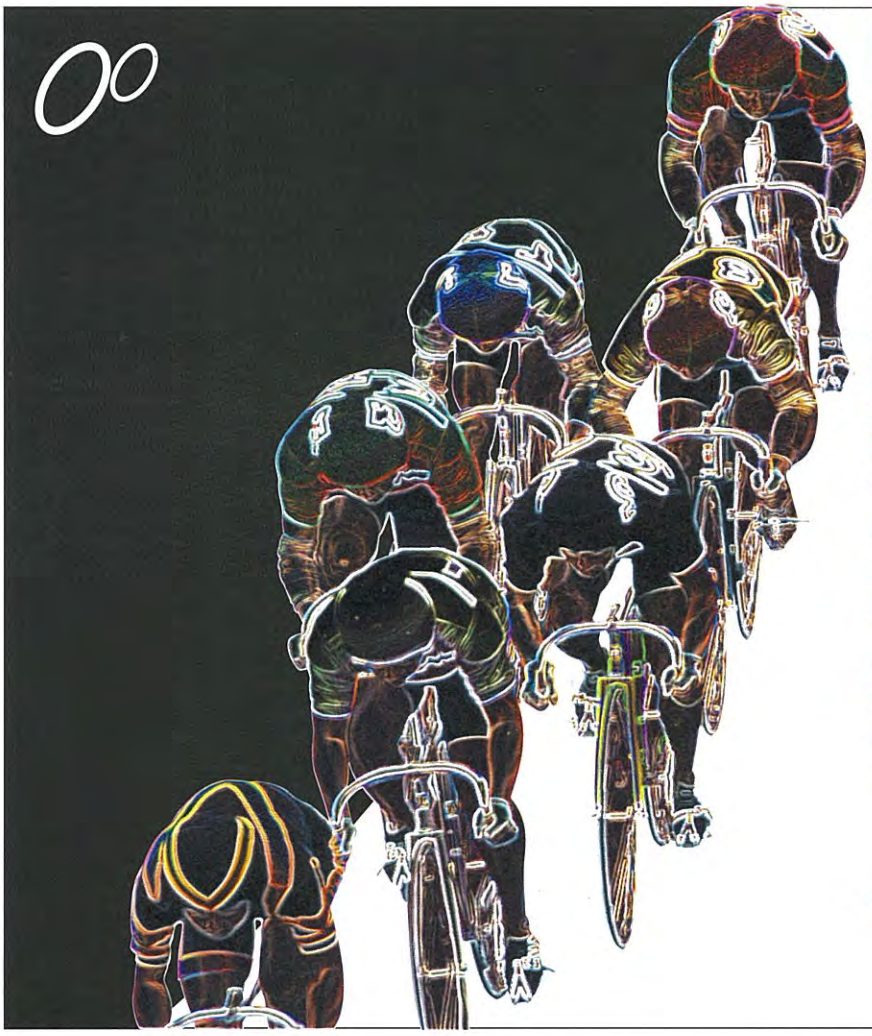
◆皆様がお持ちの情報をもとに取材をしたいと思います。ご意見・ご感想・情報をドシドシお寄せください。

参考文献
●『町名の由来』 飯塚伝太郎著 長倉智恵雄補筆 静岡新聞社
●『駿府の城下町』 若尾俊平 小和田美智子 織田元泰 中村羊一郎 黒澤 脩 小沢誠一 著 静岡新聞社
●『新通小学校創立８０周年記念誌 たかね』 創立８０年記念誌編集委員会
●『一番町学区誌』 安本 博編 一番町学区誌編集委員会
●日本の作家３５ 『笑いの戯作者 十返舎一九』 棚橋正博著

静岡文化情報「街かど」第19号

●発行(年２回)
平成14年3月
●編集・発行
(財)静岡市文化振興財団
〒420-0031
静岡市呉服町二丁目1-1 札の辻ビル６階
TEL.054-255-4746/FAX.054-653-3501
E-mail:bunshin@chabashira.co.jp

●印刷
株式会社パピア中央
静岡市小鹿一丁目62番18号



静岡けいりん開催日程表

川崎記念 場外発売
4/6・7・8・9

ふるさと防府 場外発売
4/18・19・20・21

静岡前節
4/26・27・28
F1

静岡後節
4/29・30・5/1
武雄併売

武雄記念 場外発売
5/2

全プロ 場外発売
5/10

静岡前節
5/11・12・13

高松記念 場外発売
5/18・19・20・21

静岡後節
5/25・26・27
F1

高松宮記念杯 場外発売（大津びわこ）
5/30・31・6/1・2

●「出走表FAXサービス」
054-202-1589…ガイダンスに従って…1#

●「オッズFAXサービス」
054-202-1589…ガイダンスに従って…3#

静岡けいりん
電話投票 38#

R100 古紙配合率100%の再生紙を使用しています。